# ハルキ―村上春樹とわたし

藤田喜代子
第二文学部１年　1D060569-4

＜動機＞

先日、ノーベル文学賞の発表があった。村上春樹落選に関する新聞等の論調は「残念」だというものが多かったと思うのだが、わたしはほっとした。それは、村上作品の文学的価値が低いということを認める確かな証拠と思えたからである。やっぱりわたしの思うとおりだった。ハルキ（わたしはいつも村上春樹のことをハルキと呼んでいる）の小説は、いくら売れていても、文学作品としてはまったくのインチキ。まやかしだってことを、ノーベル賞の選考委員達は見抜いているのだろう。と思ったからだ。

わたしがハルキの第一作「風の歌を聴け」を読んだ時、ハルキはすでに注目される作家であり、それを読むことがオシャレとされる作家でもあった。読んでみて、確かに今までの日本文学とは一味違ったクールな小説だと思った。わたし自身が、ちょうどその時、自分の将来もやりたいこともはっきりせず、とても中途半端な気持ちのまま、自分の「居場所」を探しているような状態だったので、主人公のとりとめのなさがよくわかり、また、それだけに身につまされる気がした。その半面、何を象徴しているのか最後までわからない意味深な出来事や登場人物が多く、胸のなかにもやもやとした疑問が残ったまま読み終えた。けれども、「村上春樹はわからない」と言うことは、つねに流行には敏感でありたいと思っているわたしにはできなかった。なんだか、自分の感受性の鈍さをさらけ出してしまうような気がして。頭の悪さがばれてしまうような気がして。

それ以後の作品でも、読んでいる過程では、ドキドキハラハラ、小説を読む醍醐味を十分味わえるのだが、読んだ後は、すっきりしないもやもや状態に陥り、頭の中はつねにクエスチョンマークでいっぱいだった。ハルキのほぼすべての小説では、その物語が完結するということはない。登場人物が行方不明のままであったり、挿入されたエピソードの意味に何も説明がなされなかったり。読み始めた頃は、その突然の終わり方が新鮮であり、わからないのはわたしの鈍さのせい？と思っていたのだが、こう毎回中途半端では、物語を完結させる能力がないのか、または完結させる手間を省いて、思わせぶりなまま読者をひきつけているだけなのでは？と、悪意を持って評価するようになってしまった。

単純な結論だけを文学に求めるのは、あまりにも低級、恥ずかしいのでは？とも思う。ハルキの小説は、登場人物やエピソードの意味を自分で考えるという、高度な読み方を要求される芸術なのだ、という意見もあるだろう。そうすんなりと思えれば、それはそれでいい。（もし、ハルキがすでに没後何十年もたって評価が定まっている人ならば、わたしは安心して物語の意味探しを楽しめたであろう。俗物根性であるが。）

わたしの頭が固いのか？　感受性が鈍っているのかも？と自分の感性にも自信がなくなってくる。このところずっと、ハルキを遠くから見ている感じだったのだが、この機会に

ハルキと向き合い、本を読み直し、ハルキとの関係に何らかの決着をつけたいと思っている。なぜなら、ハルキはかつてわたしのアイドルだったのだから。

**＜対話レポート＞**

〈はじめに〉

対話相手は、おなじグループ内の西川さんにお願いした。今までの書き込みを読んで、この授業に積極的に取り組む姿勢がとてもすばらしく思えたからである。スケジュールが合わず、時間がもったいないので、メールでのやり取りを通して対話を重ねた。（西川さんの発言にはアンダーラインを引いた。）

**〈１．ハルキは、「裸の王様」なのか？〉**

動機文を読みましたが、結局藤田さんはハルキのことをどう思っているのでしょうか？

わたしにとって、ハルキの小説との出会いは、衝撃的でした。わけのわからない登場人物・できごと…。ハルキの作品を「わからない、ヘン」と言うのは、「王様は裸だ！」と言うのに等しい行為。わたしにはできませんでした。だって、王様は裸ではなく、わたしの頭が悪いのかもしれない、わたしの感性が鈍いのかもしれないのだから。

わたしは、哲学を学びたくて入学しました。むずかしいこと・わからないことは、わたしにとって憧れです。理解できるようになりたいけれど、わからない。というジレンマ。

わからないことにじっくり向き合う、というのは、わたしにとって必要な姿勢です。（そして、その一方で、そんなこと机上の空論だ、地に足をつけて現実的に生きろ！という声も聞こえる。わたしの中で、哲学とハルキは似ている！）

「美学」の授業では、映画「薔薇の名前」「ヴェニスに死す」を見て、そこにある「記号」「象徴」を見つける、ということをしています。それは、楽しい作業です。自分の人生経験や知識・想像力等を総動員して、あれこれ考えるのは、宝探しゲームのようです。美術作品を見るのも好きです。

では、なぜ、ハルキでは、そのゲームを楽しめないのか？

ハルキの作品は、完結せず、答えが出されないことが多い。あきらかに、ゲームに引きずり込もうとしている。そこが気に障るのかも。「さあ、みなさん、これから先は、みなさんが考える番ですよ」と、ハルキがしたり顔で言っているような気がして。根本的に、ハルキのことをバカにしているから、ゲームにも参加できないのかも。

つまり、ハルキとは感性が合わない、という結論でいいのかな、という気もしてきた。

それより、そのことをはっきり認識できなかった自分、「王様は裸だ！」といえなかった自分に問題があったのかも。そして、わからないことを避ける自分の態度へのうしろめたさ…。

ゆれるのは嫌いなのです。はやくどちらかに決めて、すっきりしたい！という短絡的思考の持ち主なので、常日頃「迷う」ということをあまりしていません。ゆれ続ける体

験は、この授業をとったからこそ、のものです。

―すっきりしたい！という言葉に、わたしの短絡的なところがよく現れていると思う。短絡的だからこそ、その一方で哲学（むずかしいもの）に憧れる。

「どう思っているのか」という問いに、シンプルに「好き」「嫌い」といえないもどかしさがある。

**〈2.ハルキをバカにする〉**

「ハルキ」をバカにしている。感性が合わないと結論づけていますが、なんとなくスッキリしない感があります。文章全体を通して見ると、「ハルキ」をバカにしているとは捉えがたいし、また嫌いであるとも思えないし、好きなのかな？とも思うし、昔は好きだったけど今はどうなのでしょうか？結局どっちなの？とつっこみたくなりました。

わたしがハルキをバカにする気持ちは、くだらない（とわたしが思う）TV 番組に対する気持ちと同じです。あー、くだらない。あんな番組をおもしろがるバカな人たちがたくさんいるんだなー。なさけないよ。という感じ。

それが、TV 番組だったら、単にバカにするだけで終わることができるのだけれど、海外でも売れている（ノーベル賞候補とのうわさもでる）ハルキとなると、こんどは自分のほうが間違っているのかも、と自信がなくなってしまう。（堂々巡りです。）

ドイツの学者は「ドイツの読者は軽い気持ちでハルキを楽しんでいる」というようなことを言っていました。わたしは、軽く楽しむことができないのでしょうか？ もしもそれが、現代風の（正しい）読み方だとしたら、わたしのほうが、ハルキに期待しすぎなのでしょうか？ そんなふうにも思えてきました。

村上春樹以外の作家に対してはそういうバカにする風な気持ちになったりとかはありますか？　藤田さんはハルキだからつっこみたくなるのかな？というような気がしました。前回もいいましたが、それだけ関心が高いということなんでしょうね。

ハルキ以外の作家では、もちろんバカにしたりする作家はたくさんいますよ。つまらない、ありえない、下品、低俗、等々の理由で、バカにしてしまうのですが、そういう人たちは、もう次は読みません。そう、こだわっているのは、ハルキだけなのです。

―バカにする、という極端な言葉遣いをしたが、西川さんはちゃんとその裏側にあるわたしの複雑な気持ちに気づいてくれた。結論を急ごうとするわたしにストップをかけ、また考えさせてくれる、そしてわたしはまた迷ってしまうのだが。

**＜３．他人の評価に影響される＞**

今日の朝日新聞の夕刊に、ドイツでもハルキは人気がある、と書いてありました。ほんとに海外でも売れているのですねー。不思議。

ドイツでも売れているハルキですが、売れている＝おもしろい、いい作品とは限りません。たしかに、あれだけ長いこと活躍して世に出す作品も多いし、海外メディアも作品の良し悪しが分かってなくても、ただ話題性だけで批評する人も大勢いると思うんです。そういう人たちは、必ずいい論評をする。そうしないと本が売れないから。だから、あ

まり周りや他の人の意見に流されず、自分の観念で考えていっていいのではないのでしょうか。その人たちが間違っているとはいえませんが、少なくともその人たちより昔からハルキのことを知っているのは藤田さんの方なのだから。

ここのところ新聞でハルキが海外で読まれていることを扱ったコラムが連載されているのですが、それを興味深く読んでいます。そうですよね。西川さんの指摘のとおり、本を売ろう、と思っている人たちの存在のことは、わたしの視点からは抜け落ちていました。良し悪しとは別に海外でも売れれば、それが日本でも話題になり、読者が増える、ということはありますよね。

かなり「批評」とか「売れ行き」とかの外部情報に影響されてしまいます。村上春樹論ではなく、村上春樹論をテーマにした「『村上春樹論』論」を書きたくなりました。

―海外でもハルキが評価されていると聞いても、それを素直にうけとれないのは、自国の文化に自信がもてない欧米に対するコンプレックスもあるのかもしれないと思った。わたしは、純粋に「文学性」という立場からハルキを見ていたのだが、西川さんは「商品」としての小説、という視点に気づかせてくれた。そう考えると、ちょっと気が楽になる感じがした。

**<4. 本はおもしろければいい？>**

本なんて特に小説なんておもしろくてなんぼだとわたしは思っています。だって本って一種の娯楽でしょう。それを考えさせられるというのはどうなんでしょう。全ての村上春樹の作品がつまらない、考えてしまうわけではないのですが、わたしはそう思っています。

そう、本は娯楽として楽しんでいます。自分で読むものを選ぶのだから、自分にとって気持ちのよいものだけを選べばいいはずですよね。

わたしは今まで、好きな小説家から大きな影響を受けてきました。わたしという人間を作ってきたさまざまな要素の中に文学作品の影響は大きかったと思います。

もちろん、読んだけれども、おもしろくなくて、たった１冊だけでやめてしまった作家も多いし、ある一時期は熱中しても、そのうち忘れてしまった作品も多いです。
ハルキは疑問を抱きながらも読み続けてきた、もしかしたら唯一の作家かもしれません。
なぜでしょうねえ？もうちょっと、考えてみます。
やっぱりわたしは本は娯楽だと思っているので、難しく考えず読んだ方がいいと思います。そういう意味ではドイツの読者と同じ意見になっちゃいますが・・・。

―西川さんは、「本は娯楽」と考えていい、と言ってくれているが、それでは納得しきれない自分がいる。わたしのハルキに対する要求は高い。

**<5. 感性とは？>**

前のところで、感性が鈍いとありましたが、わたしが今まで藤田さんと少しの間ですが、メールで対話のやりとりをしている感じだと、鈍いというよりむしろ鋭いと思います。それは、わたしのバレエに対する考えを瞬時に見取り探っていき、更にわたしも思いも

つかなかったことを言われたりしているからです。ですから、どうして藤田さんが鈍いと思うのか。そこが分かりません。誰かに言われたわけではないですよね？

わたしの「感性が鋭い」というお返事をとてもうれしく読みました。なんだか、ここの部分を切り取って、お守りにしたいくらい。感性が鈍いとは、べつに、誰かに言われたわけではありません。自分でそうおもっているだけ。つねづね、「感性」というものには自信がもてずにいます。おまけにどんどん歳をとって、若い人たちとの感性の違いをかんじることもしばしばあります。たとえば、洋服の好み等で。ですから、ハルキを楽しめないのも、自分が古いのかなあと思ってしまうのです。

その一方で、自分の審美眼への自信もちょっぴりあるので、もやもやっとしてしまうのですね。わたしが興味を持つ人、好きになる人は何人もいるのですが、皆それぞれの分野で評価されているので、わたしはわたしの「アンテナ」には、ちょっぴり自信をもっています。「ほんもの」を見分ける目というのでしょうか。

誰かに興味を持つ時、その気持ちにはほとんど揺らぎがないのですが、唯一あやふやなまま引きずっているのがハルキなのです。そういう意味では、ハルキはやっぱりただものではないのかもしれません。

今、この文章を読み返すと、ところどころにわたしの「プライド」が感じられました。自分のプライドゆえにハルキにひっかかっている。プライドのあるわたしに理解できないものは、許せない！　という気持ちもあるな、と思いました。そしてまた、自分の劣等感も感じられます。両方の間でずっと揺れているわたしです。

〈対話を終えて〉

つねに堂々巡りを繰り返すわたしに、西川さんは根気よく付き合ってくれた。的確につっこんでくれたり、そう難しく考えるなと、違う視点を示してくれたり。まさに対話相手がいたからこそ、の気づきがたくさんあった。

残念ながら、今でもやはり、ハルキに対する気持ちははっきりしていない。しかし、ハルキについて考えることによって、わたしは自分の自信のなさ、プライド、他人の評価からの影響等々、さまざまな感情と向き合うことができた。自分ひとりだったら、適当なところで考えるのをやめていたはずだが、こうして相手からのフィードバックを受けることで、じっくりハルキと取り組むことができた。

対話相手とは、自分の心を映す鏡のようなものだと思った。わたしもまた、西川さんの対話相手としてフィードバックを送る側になったが、この授業で初めて出会った者同士なのに、思ったことをストレートに伝えることによって、対話の手ごたえ、というものを感じた。不思議なことに、それはとても、すがすがしい気持ちだった。

＜結論＞

ある授業で「いじめ」が話題になった。「いじめの原因はなんだと思いますか？」と先生

に聞かれた時、わたしはすぐに「ストレスだと思います。」と答えた。続いて何人かが発言したあとの一人の学生の答えに、わたしはびっくりした。「ワイドショーのコメンテーターなどは、どんな話題にも30秒くらいでまとめた答えを即答するけれども、そんなに簡単に答えられるはずがないものもある。」それを聞いてわたしは、すごく恥ずかしかった。わたし自身がまさにコメンテーターのように、複雑な問題をひとことでまとめて、自分の順番は終わったとばかり、他人事のように授業を聞いていたからである。

こんなふうにわたしは（そしてわたしだけではなく社会全体が）、ものごとをじっくり話し合い、考える、という習慣をもたずに、次々と現れる目先の問題をいかに短時間で処理するかにそのエネルギーを注いできたのだ。そのことに気づいて、さらにはっとした。わたしがハルキに対して感じていた違和感は、もしかしたら、このことに通じているのかもしれないと。

対話が終わっても、まだはっきりとした結論を見出せずもやもやしていたので、わたしはハルキの第一作『風の詩を聴け』を読んでみた。約20年ぶりの再会である。ストーリーはすっかり忘れていたが、初めて読んだ時のことをいろいろ思い出し、感慨深かった。

第一作からハルキはすでに、「ハルキワールド」を展開していた。バックグラウンドのわからない登場人物たち、途中で消えてしまう人、意味深な出来事、思わせぶりなせりふ…等々。後日談が語られている分だけ、最近の作品より後味はマシといえよう。

しかし、これを読んでわたしは、かつてのわたしがこの作品を理解できなかったのもあたりまえだな、と思った。そもそもこの作品は、はじめから理解できない事柄（主人公の不安、不安定な日常、見えない未来、青年期ならではの何か確かなものを求める気持ち…等々）をテーマとしているのだから、そこに何かのはっきりとした結末を探しても無理なのだ。はじめからわざとピントを合わせていない写真を、なんとかしてはっきり見ようとあれこれ試すのが無駄なように。

そして、そのぼやっーとした雰囲気、何が起こるかわからない不安な気持ち、さまよう気分こそが、わたしがこの作品に惹かれた理由でもあった。うまく言葉に表すことはできないが、確かに胸の奥にずっと重くのしかかっている不安感をこの主人公に見出したからこそ、わたしはハルキが好きになったのだった。

ハルキはそれからもずっと、変わらなかった。いつでも主人公は迷い、途方にくれ、さまよっている。それに較べて、わたしはどうだっただろうか？　たくさんの人と出会い、いくつかの仕事を経験し、楽しいことも辛いこともいろいろあった。今の安定感は何物にも代え難いが、それと同時に、何かを捜し求めたり、迷ったりする過程を面倒なもの、まどろっこしいものとして切り捨ててきたのかもしれない。ちょっと考えてもすぐには答えが出ないものには、さっさと自分なりのお手軽な答えを見つけて、一丁あがり！　はい、次の話題は何？　それは、まるでワイドショーの秒刻みのスケジュールのように。

対話を終えた今でも、ハルキのことを簡単には「好き」または「嫌い」とは言えない。そんなわたしの対話レポートに対して「ほんとはハルキのことすっごく好きなんじゃないですか？」というコメントをもらった。どっきん！とした。なんだか自分が好きな異性に対して、わざと意地悪してしまう中学生になったような気がした。そうなのかもしれない。わたしの方を見て！（わたしの希望通りの結論を読ませて！　わたしに答えを教えて！）と思っているのに知らん振りされて、いらいらしているのかもしれない。そう思うと、すごく恥ずかしかった。

でも、少なくとも、これだけハルキと向き合っていろいろ考えたことは、決して無駄ではなかった。わたしは、わたしの心の中のいろいろな部分と直面した。プライドだったり、その裏返しの劣等感だったり。対話をしてくれた西川さんがわたしの鏡となってくれて、わたしの様々な気持ちを映し出してくれたのだが、ハルキもまたわたしの鏡として、今までも、そしてこれからもずっとわたしのそばにいるのかもしれない。

入学してから９ヶ月たち、もうすぐこの学年も終わりに近づきつつある。そこで学んだことのひとつに、「批評」という姿勢がある。やみくもに賞賛するのでなく、またシニカルに斜に構えて見るのでもなく、できるだけ中立の立場で誠実に評価するという態度である。わたしが今後ハルキを読むときに立つべき位置は、この批評という立場かもしれない。それは、純粋なファンにはとれない立場であり、またはなからハルキを馬鹿にしている人にもできないことであろう。もしかしたら、わたしのようにつねに懐疑的に読んでいる者こそ、ハルキを批評できるのだと思っていいのかもしれない。

ハルキの評価は、まだ定まっていない。高く評価する人がいる一方で、「ふん、あんなもの文学じゃないよ」という人もたくさんいるだろう。そしてまた、西川さんの指摘のように、「商品」としてのハルキがあり、それは世界中に広まりつつある。本当にいつかノーベル賞をとってしまうのだろうか？　そうしたらわたしは、「わたしなんてハルキの 20 年来のファンなのよ」なんて堂々と言ってしまいそうだけれど。それとも、何十年か後に、「そういえば村上春樹って、昔は売れてたけど、今はさっぱりね」なんていうこともあるかもしれない。

わたしが変わったように、ハルキもまだまだこれから変わっていくのかもしれない。それを見ていくことできっと、時を重ねることもまた楽しいと思えるのかもしれない。

本の売れ行きや批評に影響されやすいわたしだが、これからもハルキ情報には敏感でいようと思う。ハルキの作品そのものを味わうとともに、それを他の人々はどんなふうに読み、どう解釈したのか、というところにとても興味があるのだ。今でも新しい作品を読むたびに、ハルキファンの友人などに「どうだった？」と感想を聞いてしまうのだが、その答えからその友人の考え方、感じ方を読み取るのもまた楽しい。

今、わたしは、こんなことを想像している。世界のどこかで、それはネパールの山奥の

ホテルで星を見ている時かもしれない、または、アフリカのサバンナで気球に乗っている時かもしれない。そんな遠くの非日常空間で、ひとりの外国人が話しかけてくる。「あなたは、日本人なのね？　わたしはハルキ・ムラカミのファンよ。あなたは、ハルキを読んだ？」わたしはきっとすぐに、「どれが一番好き？　新しいのは読んだ!?」と叫ぶだろう。

いつか、どこかで、こんな楽しい出会いが待っているかもしれない。その日を楽しみにして、わたしは控えめながら（そして文句を言い続けながら？）ずっと、ハルキを読み続けるだろう。ハルキを自分自身の鏡として。

＜終わりに＞

相互評価で「話があちこちに飛ぶ」というコメントをもらった。確かにそうだ。けれども、その混乱がまさに、今の私の頭の中身である。けっしてハルキについて、すっきりとした結論がでたわけではない。混乱を混乱のままにする、ということをこのレポートを書くことで学んだのである。、その証拠として、レポートには最終的には手を入れないことにした。不完全であっても、ごちゃごちゃとしていても、そのままを出すことにした。

さて、こうして授業が終わろうとしている今、短い間であっても、いろいろな意見を交わした場がなくなるのは、寂しい気がする。（途中では、ネットを開くのが面倒だと思ったこともあったのだが。）それは、対話が終わってしまうことの寂しさであろう。

私たちの多くが、対話を通して自分自身を見つめることができたことを大きな収穫と感じていた。しかし、その体験は、これからも継続可能だ。初対面であってもメールだけであっても、正直に誠実に対話を重ねていくことで不安や不満がやがて自分への自信に繋がっていくことを経験したのだから、その対話をこれから自分の身近な人と行っていくことはたやすいはずだ。もしかしたら、この瞬間、私のすぐ隣に座っている人がよい対話相手になってくれるのかもしれない。ちょっとした勇気が必要だけれど、話しかけてみよう。

対話をしてくださった方たちへ、ありがとうございました。出会えてうれしかったです。同じ学部の者として、ふたりはわたしの誇りです。細川先生、メンターの皆さん、ありがとうございました。先生の HP でこの授業がどのように公開されるのか、客観的な目で見るのも楽しみです。

そして、参加したすべての皆さん。お疲れ様でした。ありがとうございました。ここでの成果が、今後も皆さんのお役に立つようお祈りしています。